『未亡人桃子の新しい恋』

　半年前に未亡人になった桃子は寂しさのあまり、桃子を心配して顔を見せに来てくれていた義息子の淳を誘惑し、体を重ねてしまった。

　さらに間の悪い事にその事を線香を上げに来た義母にも知られてしまったのだ。

　義母は二人の関係に激怒し、桃子に詰め寄った。

　元より淳とこの先どうこうなるつもりもなかった桃子は、それ以降淳に会う事はせず、一人荷物をまとめて家を出たのだった。

　数年後、桃子は淳と街で偶然再会した。あの日の事を桃子はただの一度も忘れた事は無い。

　旦那という心の支えを失った桃子は自暴自棄になっていた。一体いつまで喪に服していれば良いのだろう。再婚のあても無い。そんな事ばかりを考えて過ごした数年間は、

思っていたよりもずっと孤独だった。

　亡くなった夫とは随分と年の離れた結婚だったが、それなりに毎日幸せだった。

　彼が病に侵されていると知った時、桃子は「あなたが死ぬのなら、私も死ぬ」と言って泣いて縋った事もあった。それほどに桃子は彼を愛していた。

　だからだろうか。彼にそっくりの淳にまた甘えてしまったのは。

　その夜、桃子は自室で淳に抱きつきながら涙を流していた。桃子は淳の懐かしい男の匂いに胸が高鳴るのを感じていた。

「お義母さま、ごめんなさい」

　桃子はそう言い、淳の胸に顔を埋めた。寂しい。誰でも良いからこの寂しさを紛らわせて欲しい。

　そんな桃子の心が伝わったのか、淳もしっかりと桃子を抱きしめる。

桃子は淳シャツのボタンを一つずつ外していく。淳も桃子のワンピースのファスナーを性急に下ろしていった。

ワンピースがはらりと落ち、桃子の白く滑らかな肉体が現れる。そしてそれを見た淳もＴシャツとパンツを脱いだ。

「義母さん」

そう言って淳は桃子の頬に優しく口づけをした。その柔らかさに思わず桃子の瞳から涙がこぼれ落ちた。

二人は裸のまま抱き合ったままベッドへ倒れこんだ。そして激しいキスを交わしながらお互いの体を愛撫し始めたのだった。

二人の息遣いが激しくなり、やがて桃子の喘ぎ声が響き始める。しかしそれは雨音にかき消されていった――。

「義母さん、ずっと会いたかったよ」

淳のささやき声と息づかいが桃子の耳に響く。

「私もよ。淳さん」

　桃子は嬲られる乳首に思わず声を上げた。

「義母さん、気持ちいい？」

「ええ。とても」

「もっと気持ち良くしてあげる」

　淳は桃子の乳首に吸い付いた。そして舌で転がす。

「あぁ、いいっ」

　さらにもう片方の乳首を指でつまむ。そして強く引っ張ると桃子の口から大きな喘ぎが上がった。

「ああっ、だめぇ！」

　しかしそんな声とは裏腹に桃子の体は敏感に反応してしまっているのだった。

そんな様子を見た淳はさらに激しく責め立てた。

「ああっ、淳さん！」

　二人は抱き合い、激しく体をくねらせる。そしてお互いの唇を求め合うように、この数年間の寂しさを埋めるかの

ようにキスを続けるのだった。

「あ、んっ！」

　桃子は淳の耳元で囁く。その声からは快感と悦びが入り交じっていることが感じられた。

「義母さん、可愛いね、相変わらず」

　そう言って彼は桃子の下腹部へと手を伸ばしていく。そこはすでに愛液で濡れており、淳はそれを優しく指で拭いとった。そしてその指を今度は彼女の割れ目へ擦り付けるように動かし始めたのだ。すると桃子はまた大きな声を上げ始めるのだった。

「義母さん、ここすごいよ」

　そう言うと彼は桃子のクリトリスを指でつまんだり弾いたりして刺激し始めたのである。その度に桃子は体を震わせて感じてしまう。そしてついにその時がやってきた

「ああ！　駄目！　　イク！　イッちゃう！」

　そして次の瞬間、桃子はあっさりと絶頂を迎えてしまっ

たのだった。

　淳は桃子が絶頂しても手を止めず、今度はお互いの性器を刺激し合っていくようになったのだ。それはとても淫らで官能的な光景であった。

「義母さん、すごく濡れてる」

　そう言って淳は桃子の割れ目に指を入れてくる。その瞬間に彼女の体はビクンと跳ね上がり一際大きな声を上げた。

「ああっ」

　そんな桃子の反応を見て淳は嬉しそうに微笑む。

「義母さん、気持ちいい？」

「ええ……とても」

「もっと気持ち良くしてあげるからね」

　そう言って淳は今度は桃子のクリトリスに吸い付いたのだ。

「ああっ」

　その反応に彼はさらに強く吸い上げていく。

「ああん、いいっ！」

　徐々に淳の息が荒くなってきた。体勢を変えて桃子は淳の肉棒を優しくしごいてやると、淳は低く呻く。

「義母さん、気持ちいい」

　桃子は淳にもっと快感を与えようと手の動きを早めると、もう我慢しきれなくなったかのように、淳が動いた。

　固く閉じていた桃子の中は淳の愛撫によってトロトロになっている。そこへ、淳の肉棒が添えられた。

「義母さん、挿れるよ」

「ええ、来て……あぁっ！」

　そして、ついに数年後しに桃子は淳の肉棒を受け入れた。

　あの頃よりもずっと逞しくなった淳は、もうすっかり立派な雄だ。そして桃子は随分ご無沙汰だったので、いくら蕩けていても淳の肉棒を最後まで咥えるのに時間がかかっ

てしまう。

「ああっ！　またイク！　イッちゃう！」

　淳が桃子の膣の中に全てを収めたその瞬間、桃子の体はビクンと跳ね上がりまた絶頂を迎えてしまった。

　おまけに今度はまるで噴水のように潮まで噴いてしまったのだ。飛び散った桃子の潮は淳の下腹部を濡らす。

　そんな事はお構いなしに淳はさらに激しく、深く桃子の奥を抉ってくる。

「だ、駄目、淳さん、またすぐにイッちゃうわ」

「いいよ、沢山イッて。会えなかった数年間、俺がどんな思いでいたか知ってほしい」

　淳はそう言って桃子の膣の中を何度も何度も擦ってくる。Ｇスポットに淳の肉棒が擦れる度に桃子は体を仰け反らし、その反応を淳は楽しんでいるようだった。

　やがて、淳の肉棒が桃子の中で一際大きく膨らんだ。それに気づいた桃子は慌てて身を引こうとしたが、淳は桃子

の腰を掴んだまま離そうとはしない。

「駄目よ、淳さん！　中は駄目！」

「どうして？　親父はもう居ない。だから義母さん、俺の子を産んでよ」

「そんな事……んんっ！」

　いよいよ果てそうなのか、淳がさらに腰を動かしだした。その動きに合わせるかのように桃子の腰も待ってましたとばかりに揺れる。

「あ、ああ、あっん！」

「孕め、孕めよ！　そしたら、もう離れないで済む」

「駄目、淳さん！　そんな事したら――ああぁっ！」

　呻くような淳の声に桃子はどうにか体を離そうとしれたけれど、いよいよその時はやってきた。

　淳の男根が桃子の中で爆ぜたのだ。その瞬間、下腹部にじんわりと懐かしい温もりが蘇る。

　桃子の身体は喜んでいた。雌としての本能が、雄の精子

をただただ喜んでいたのだ。

　一度外れた箍はもう戻らない。

　桃子と淳はその後、互いを貪るように何度も何度も身体を重ねた。朝が来て、また昼が来ても離れていた数年間を取り戻すかのように。

　夜、ようやく二人は冷静になって互いの出で立ちを見て思わず顔を見合わせ笑った。

「お義母さまに何て言えばいいの……」

「今度は俺も頭下げるよ。ばあちゃんなら分かってくれる。だって、義母さん……じゃなくて、桃子さんの事、可愛がってたから」

　初めて淳に名前で呼ばれた事に桃子は思わず頬を染めながら首を傾げた。

「そうかしら？」

「そうだよ。それに俺、桃子さんが出ていった後もずっと

桃子さんの事が好きだってばあちゃんに言ってたから。……それは、今も」

「……淳さん……」

　桃子は複雑な思いで淳の言葉に泣きそうに顔を歪めた。そんな桃子に淳は優しく言う。

「何年かかっても、親父より好きって言わせて見せるよ。だからもう、どこにも行かないで」

　あまりにも優しい淳の声音と表情は旦那とあれほどよく似ていると思っていたけれど、よく見ると全然違う。

　旦那の事をこの先もきっと忘れる事は出来ないだろう。

　けれど、いつかは前を向かなければならない。その時、隣に居るのは淳が良い。

　桃子は頷いて淳の優しくて逞しい胸に抱きついた。